

第 3 回 ATF コンファレンス 開催記

2025 年 11 月 9 日(日)～11 日(火)、沼津のプラサヴェルデにて第 3 回 ATF コンファレンスを開催しました。昨年の第 2 回に続き、今回も幅広い交流を目指し、研究会員、評議員、理事などの財団関係者に加え、外部講演者、奨励賞受賞者、研究助成採択者、財団アルムナイを招待しました。さらに、各研究会を通じて若手研究者向けの招待枠を設け、次世代を担う方々との交流も積極的に進めました。参加者は 103 名(前回 80 名)と過去最多となり、招待講演や研究講演、合同研究会、そして深夜まで続いたナイトセッションなど、活発で有意義な 2 泊 3 日のプログラムとなりました。

最初に、遠藤守信理事長よりご挨拶がありました。

当財団の定款で示された目的は「異なる発想を持つ人材による専門領域を超えた研究の推進、及び新世代を担う若手の育成に寄与し、もって人類社会発展の基礎となる科学技術の振興を図る」ことです。コンファレンスや研究会は、その理念を実現するための重要な場となっています。

近年、急速に発展する人工知能(AI)は、2013 年にオックスフォード大学のマイケル・オズボーン教授が発表した論文『The Future of Employment』で「10 年後に消える職業」が示唆され、世界に衝撃を与えました。その中で研究者への影響も指摘されています。一方で、AI が不得意とする能力として「創造的思考」と「社会的知性」が挙げられ、創造性やコミュニケーション能力の重要性が改めて強調されています。

また、2021 年に京都賞を受賞した哲学者ブルーノ・ラトゥール博士は「科学は孤立した真理の探求ではなく、広いネットワークの中に位置づけられた営み」と述べています。昨年もご紹介しましたが、マーク・グラノヴェッター博士が提唱した『Strength of Weak Ties(弱い紐帯の強み)』のように、ちょっとしたつながりから新しい視点や情報が生まれます。ここから生まれる新たな知とのつながりが、皆様の今後の研究活動をさらに豊かにすることを期待しております。

最後に、日頃より当財団の活動をご支援いただいているセイコーインスツル株式会社に、心より御礼申し上げます。



【招待講演】

五神 真氏 国立研究開発法人 理化学研究所 理事長
「基礎科学が創る人類社会の未来
- 包摂的で持続可能な成長に向けて」

光量子物理学の研究者、そして東京大学総長としてのご経験を通して、地球と人類の持続的な発展に向け、アカデミアに何が期待されているのかをご講演いただき、参加者との活発な質疑が行われました。



【鼎談】 ディスカッション「日本研究界の良いところ、悪いところ」

杉原 加織氏 話題提供、高機能センサ研究会代表
一杉 太郎氏 財団フェロー、元界面ナノ科学研究会代表
齊藤 英治氏 財団フェロー、前スピントロニクス研究会代表
柴田 直哉氏 財団フェロー、前界面ナノ科学研究会代表



【奨励賞 授与式と受賞講演】 座長: 齋藤 理一郎 理事 (東北大学名誉教授)

関根 智仁 氏 (山形大学大学院 有機材料システム研究科)

「ポリマーナノ複合材料によるソフトロボティクス触覚センサの創出」

小嶋 良輔 氏 (東京大学大学院 医学系研究科) <WEB 参加>

「新規計測技術による細胞外小胞放出メカニズムの包括的理解」

【研究助成 成果発表】

竹内 祐太郎 氏 (物質・材料研究機構)

「スピントルクによる反強磁性ナノ構造の超高速・高効率制御」

佐々木 健人 氏 (東京大学)

「量子センサによるナノ薄膜物性の開拓」

竹内 七海 氏 (東京農工大学)

「プローブ利用ナノポアによる体液中がんマーカーの直接検出」

豊田 良順 氏 (東北大学)

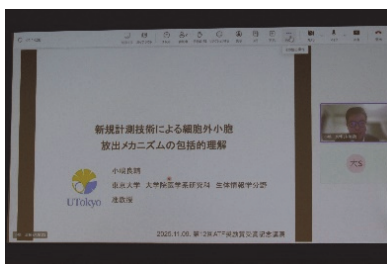
「フォトニック分子ワイヤの開発とその光輸送能の解明」

山岸 裕史 氏 (産業技術総合研究所)

「界面イオンダイナミクスを可視化する高速オペランド KPFM 法の開拓」



<奨励賞 授与式>



<奨励賞 受賞講演>



<合同研究会>

【合同研究会 開催】

○界面ナノ科学研究会・量子物質研究会

○高機能センサ研究会・ナノメカニクス研究会・バイオ単分子研究会

【5研究会 開催】

○界面ナノ科学研究会 (千葉大地 東北大学)
○高機能センサ研究会 (杉原加織 東京大学)
○ナノメカニクス研究会 (土方亘 東京科学大学)
○バイオ単分子研究会 (渡邊力也 理化学研究所)
○量子物質研究会 (越野幹人 大阪大学)

(各代表)

